

第1回 比較農業技術研究会(東南アジア大陸部稲作圏における農業近代化以降における技術展開の国際比較：「京都大学東南アジア研究所国際共同研究拠点Ⅱ型プロジェクト」)

日時：2016年5月31日(火曜日) 15:00~17:30

場所：東南アジア研究所東南亭

参加者：安藤、内田、松田、小林、小坂、赤松

研究について

- 緑の革命終焉以降の農業の展開
 - 近年農業に対するプライオリティは低下している。1980年台の緑の革命以降、各国は食糧増産のおおよその目標は達成(米輸出：タイ、ベトナム)。また1990年代にプライオリティは農業から他産業・工業の分野へシフトしており、上(政府)からの農民に対するプレッシャーは弱まっている(バングラデシュ)。
 - 上からのプレッシャーの減少(緑の革命・食料増産の区切り)による農民の自主性の解放、そして新しい技術、農村社会の変化(労働力の減少や商品作物の重要性の増加)などから今また地域の農業は新たなフェーズへ移行し、新しい農業の形態が出現し、どんどん変わっていつている。伝統的農業技術への回帰、その改良もみられる。

- 農業技術
 - 現在農業技術研究を東南研でやっているのは安藤准教授くらいで、農業技術を見ることのできる研究者は他分野に流れる傾向があり、残念である。
 - 地域研究のなかで、農業やその技術に関する研究は減少傾向にあるが、技術は地域を捉える上で重要な視点である。
 - 農業技術に関する研究(かつての東南アジア研究センター自然系の主流であった)復権を目指すべきである。そのことが現在の東南アジア研究所の研究体制・研究姿勢に一石を投じることになる。
 - 農業技術は植物生態、土地環境のみならず、経済、食事、民族文化、手間替えなどの社会システムや家屋の造りなどとも密接に関係している
 - 生業(農業)は地域の生活リズムを形成する基本であると認識すべきである。
 - 参加者がそれぞれの得意分野(植物生態、経済、民族文化、地理、生業論などなど)を活かして地域の農業技術に対するアプローチをおこなうことを目指す。

- 比較研究・協同研究
 - 共同研究はワークショップを開いて終わりということが多々あるが、昔は頻繁に勉強会が開催されており、学生よりも先生自身が一番勉強していた。
 - 協同研究と国際比較の原点に立ち戻り、それぞれの得意分野をお互いに学びなが

ら自分の調査にも取り込み、調査技術、視野を広げていくことを目指す。

- 参加可能な研究者は実際に他研究者のフィールドを訪れ、現地を見て直接現地の人や担当研究者から話を聞き、学習と比較ができれば、今後の共同研究の在り方を考える上で大きな意味を持つ。

- 出版

- 英文誌投稿原稿は取り敢えず保留し、まずは日本語で出版する。
- 京都大学東南アジア研究所の地域研究叢書で出版を目指す。出版資金としては「京都大学東南アジア研究所国際共同研究拠点Ⅱ型プロジェクト」を前提とするが、可能であれば他の資金の獲得も目指す。
- 1年目→日本語で書く(出版ではない)。
- 2年目→1年目に書いた内容を検討・修正し、日本語版・英語版の出版を目指す。

- 研究会の名称

- 比較農業技術研究会(Comparative Study on Agricultural Technology(CSAT))

Guy Trebuil 氏の招へいについて

- フランス人研究者でタイを拠点に農業に関する研究に取り組んでいる。
- 今回の東南研への招へいは二度目である。
- 日本滞在中にタイでの自身の研究に関する書籍を執筆する。
- 英文書籍の出版に向けた日本人研究者の英文校正を依頼する。

今後の研究会の予定

- メーリングリストの作成(CSAT@cseas.kyoto-u.ac.jp)。
- Google Community を通して情報の共有化と意見の交換を行う。(※メンバーは G-mail のアカウントを取得し、内田(uchidah@cseas.kyoto-u.ac.jp)まで G-mail のアドレスを連絡)
- 3ヶ月に一度のペースで勉強会を開催する
- 勉強会ではよい書籍があれば輪読会をおこなう
- 次回の研究会は9月30日(金)(内容：参加者各位は研究のアウトラインの発表、また良い書籍があれば輪読会を行う)。

議論

- HYV の後継とされるハイブリッドライスの未普及：種子が再生産できない+美味しくない(食べれない(ブタのエサもしくはブタのエサ以下)・市場で売れない) → 農民のモチベーション低下→未普及(安藤、内田)

- 水利用(ミャンマー、バングラデシュ)：ミャンマー→用途ごとに溜池があり、その水を生活・生業に利用。バングラデシュ→以前はミャンマーと同じであったが、現在は組み上げ式ポンプ(LLP/STW/DTW)の普及(NGO + WHO・UNESCO のプロジェクト)→その結果、地下水のヒ素汚染問題が浮上している。(安藤、内田、松田)
- 農村問題 (過疎化)：フランスでは定年後は田舎に移住し、スローライフを送るのがひとつの憧れであるが、日本では定年後も都市部から離れないのが現状(安藤)。
- カンボジアでのフィールド講義：ここ数年カンボジアで現地の学生を対象に数日間のフィールド講義を何人かの研究者と一緒に日替わりでおこなっている。フィールドを前に他分野の理解を深めることができ有意義である (小林)。
- 一品主義：特定の対象を突き詰めていく (例としてイモの伝播の研究や「稲の道」) のもよいが、その後の研究が広がっていかない傾向にある(安藤)。